

## 史料紹介「御触控」(徳島県立図書館所蔵「呉郷文庫」)

須藤 茂樹

「専門研究Ⅰ」  
平成二十八年年度受講生

四国大学文学部日本文学科開講の「専門研究Ⅰ」の平成二十八年年度の教材として、徳島県立図書館所蔵「呉郷文庫」のなかの「御触控」を選び、

学生たちと解説した。本稿では、その成果として解説文を掲載するものである。受講者は、阿部愛未、奥藤貴史、晃昇園永、四宮朋佳、玉谷峻一、吉田衣里で、翻刻文のとりまとは阿部、四宮、確認は須藤が行った。

「御触控」は、幕府や徳島藩から出された法令を記録したもので、徳島藩の地域支配を考える上で、基本的かつ重要な史料となる。

内容は、家中の者の盆踊り参加に関する規制、家中の学問所出席の件、貨幣改鑄の件、観照院(徳島藩十代藩主蜂須賀重喜三女寿代)の死去後の対応、善性院(十二代藩主蜂須賀斉昌の正室鷹司并子)の一周忌の対応、「代々様より下し置かれ候御書類」、すなわち代々藩主の判物差出命令、甲州川普請、御鷹の雁拝領、藩主蜂須賀斉昌の城崎温泉湯治、参勤交代、年頭挨拶の作法、有馬温泉湯治留守中の対応、家中相撲取菊ヶ浜弥吉の祝儀相撲興行許可、御鷹の雲雀拝領、火の用心、年中行事、華美の制限、芝居興行願、質素儉約など多岐にわたる。

(外表紙)

御触控 全

(表紙)

天保九戌年七月ヨリ

(呉郷文庫印)

御触控

(一丁目表)

御家中之面々盆中踊見物ニ罷越候義、相調不申段、孰れも相心得可罷在候、近年心得違之向も相聞え、且又白晝異相之體にて、島々徘徊仕勿論輕輩之者ニは可有之候得共、中にハ諸士之内ニも右ニ相交候哉ニも相聞へ、士分ニ有之間敷處、行別て如何之事ニ候、文化度傳達ニ相及候懸も有之所、近年猥相

成候二付、尚又詰度相愼候様觸達候事二候條、以後不心得之義有之候ニ於てハ、無御手當御咎可被仰付候間、以後相心得候様、可有通達旨御目付中申進事、

(一丁目裏)

戊七月八日 右ハ島觸

先月廿六日為上使土屋彌學殿を以

若殿様御 領被遊候間、可奉恐悅候、此段御家中一統奉承知候様、可被相觸候、且右二付 太守様 若殿様へ御賀之儀、来る二十三日四ツ時ハ八ツ時迄之間、於 御城御張付申上候事二候條、此段も一統相心得候様、可被相觸候、以上、

戌八月廿日御代官ハ達

御家中之面々學問所出席之儀二付、先達而以來度々及觸達、尚又去る未年後學厚御趣意を以て、別紙

(二丁目表)

之通相達置候所、在國時ハ餘程出席も有之候得共、追々相減、此比ニてハ別て出席も少し相見へ如何之事ニ候、依之尚又一統篤と相心得無油断益出席候様可有之候、此段各ハ通達可有旨御目付中申進事、

八月

天保六年七月廿四日

御家中之面々學問所出席之義二付、先達て度々及

觸達、尚又文政三辰年別紙之通相達置候處、又々近年出席少く相成候根元勵字御趣意を以て御場所

(二丁目裏)

も御達置被 仰付置候義ニ候得者、重々相心得、年若之面々ハ勿論、其餘迎も無間断令出精候様有之度事ニ候、此段各ハ寄々可有通達旨御目付中申進事、

御勝手方御行迫二付、此度無御抱歩懸被召上候御預所之義、委く頃日相達候懸り候得者、御家中之面々御年限中儉約相守永續可申事ニ候得共、小祿之面々ニ於てハ、地盤餘有も無之義故、難渋も可仕、依之御藏高百五拾石以下無足之末々迄難宛行、尚又

(三丁目表)

有之候借財利足之義、去る卯年之引合を以て、左書之通り御年限中利減被仰付候條、重々質素相暮不都合之儀無之様相心得度事、御藏米高百五拾石ハ無足以下末々迄利足之義、御年限中六厘減打被 仰付候事、

但譬ハ地盤壹歩之利足ニ候得者、九朱四毛ニ相成候利合ニ候事、

右之趣、御家中可有通達候、尤無格末々之者共ハ、夫々支配頭ハ相達候様、且町御奉行・御郡代・御藏奉行・郡御藏奉行へも御通達可有旨本ノ中申進候事、

(三丁目裏)

八月廿七日

右ハ御普請奉行郡御代官ハ九月六日達、

今度於

公義大判吹増之義ニ付、別紙之通御書付御渡被成候、依之御家中可觸知吉被仰付候條得其意、例毎之通可被申觸候、尤支配之者共へも相達候様可被申聞候、以上、

八月廿八日

大目付

(四丁目表)

大判之義、享保之度吹改後年數相建焼失等にて減少致候ニ付、此度吹増被仰候間、新古取更無滯令使通用候、右之趣可被相觸候、以上、

六月

右之通御仕置可被仰聞候ニ付、相達候條、先々無滯刻付を以て御順達有之、相濟方ハ来る十一日迄藤三衛門等へ御差可被成候、以上、

九月二日

九月七日御代官ハ達

松平越前守様先月廿八日御死去ニ付、今明兩日遊

(四丁目裏)

興鳴物差留穩便可罷在旨 右ニ付若殿様御半減之御忌服被為請候ニ付、御家中諸士肝煎番之方明十九日御仕置宅へ罷出奉伺御機嫌候様、島々九月十八日、

戌十月十三日

一 觀照院君様五月二日ハ御違例被為在、四日申刻御卒去被為遊、伯母甥之御間柄ニ付、太守様十三日ハ廿三日迄御中陰十五日迄三日之間、作事御差留、十九日迄穩便、御家中廿三日迄物靜ニ有之候様、右ニ付十四日四ツ時ハ八ツ時迄御帳付、十九日廿四

(五丁目表)

日御當職御宅へ罷出、肝煎番之者ハ御機嫌相伺候様、島々十三日申下刻到着、

覺

一 他國為御用罷越候面々往來案内先達て相達有之候得共、步懸御用捨方ニ御用候間、尚更不相洩様時々御藏所へ案内有之候様、

一 此度被召上候步懸之儀ハ、無足諸士末々とも去る卯年之通、米麦代建上納被仰付候てハ上納銀目之儀、御藏所承合、夏ハ七月五日、冬ハ十二月五日限御藏へ上納仕候様、

(五丁目裏)

十月十三日右觸狀、同十四日御代官今達、

三人七石銀札三拾九匁一分七厘三人五石、同式拾五匁四分式人六石同式拾三匁五七厘三分懸、

夏冬とも、

戌冬季今丑夏季迄六ヶ度被召上候、

善性院様一周忌御法事九日・十日両日御執行二付、御香莫銀三 宛持參可仕旨小奉行 之儀ハ御寺へ相供可為 及旨、

十月四日御代官今達有之、

(六丁目表)

覺

一御代々様今被下置候、

御書類左之株々追て被為御覽候條、所持仕候面々ハ、左書日限之通於 御城御年寄之面々へ差出可申、尤写書仰付相濟次第送被下候、猶又日限之儀ハ追テ可相達候、御支配有之面々ハ支配頭へ取都め可差出事、

一其家々毎ニ被下候御直書付、且御直書ニ無之とも、

御結構の御言葉ニて御直判有之御書類、

一其家ニ當不申とも御直書之分、

(六丁目裏)

一右之外にも若心方難心得御書類有之候ハ、差出節御年寄へ相尋差図次第追て差出候とも、又ハ其節持參ニ而、差図之上差出候とも勝手次第之事、

右御書付類裏手ニ小く自分性名相認張付置、一箱

ニ都て差出、尤箱も性名相認可申事、

但表装等仕立候分ハ其俣可差出候、

一御判持所付

一御□割

一御詩歌御一行物類

右株々御用ニ無之二付、差出不及候事、

一江戸其外他國御用ニ罷越居候面々罷帰候上、差出方御目付之面々へ尋出候事、

(七丁目表)

一御普請奉行始高取諸奉行、

右八十一月十六日今同十八日迄差出候事、

一無足諸奉行日銀格、

右八十一月廿六日今同廿八日迄ニ差出候様、

一支配付之面々、

右八十二月朔日今、同三日迄ニ差出候事

右之通御目付中今申来候ニ付、其旨相達候條、夫々無滯刻付を以、御順達有之、相濟方今来月七日迄藤左衛門方へ御差戻可被成候、以上、

十月廿七日

(七丁目裏)

右觸御代官今十月晦日迄、

今度徒 公義文政度、吹直被仰付候、小判壺歩判并真字草字式歩判とも、引換之義ニ付別紙之通り御書付御渡被成候、依之御國中可觸知旨被仰出候得、

其意例毎之通可被申觸候、尤支配之者へも相達候様可申聞候、以上、

十月廿八日

大目付へ

文政度吹直被仰付、小判壹歩判并真字草字式歩判

(八丁目表)

共、向後為引替差出候へハ、道路遠近ニ不拘百勿ニ付金匁宛御手当として持主へ被下候間、右金所持之者早々差出可申候、且真字式歩判之義ハ追て引換相濟、世上残少ニハ相成候得共、通用停止之品ニ付、尚又精出引替可申候、若此上にも貯金之者於有之ハ、細々可及沙汰候條、其段兼て相心得候様、御料ハ御代官、私領ハ領主代頭へ急度可被申付候、右之趣可被相觸候、  
九月  
右之通御仕置被仰聞候ニ付、先日相達候條、先々無滞御順達有之、相濟方へ来月十日迄藤左衛門方へ

(八丁目裏)

差出可被成候、以上、  
十月晦日

お静様今暁丑刻御死去候ニ付、今一日作事差止、廿五日迄穩便、

太守様

若殿様御定例之通、御忌服被為受候ニ付、御仕置面々廿四日罷出奉伺御機嫌候様、加藤歛太郎殿へ

傳觸、  
十一月廿三日

松平越中守様六月十一日御死去ニ付、廿五日へ廿

(九丁目表)

七日迄三日之間穩便可罷在旨  
十一月廿六日島觸到来、

来年頭席ニ御禮申上候、宜諸事共前年之通りニ候、尤御慰斗被下置候義故、夫々席順可罷出候、

元日・二日朝六ツ半時揃三日同六ツ時揃、

去る正月以来、左書ニ相当候義於有之ハ、月日書付御取揃、来る十八日御城へ可被差出之支配有之面面ハ夫々取揃、右同書差出候様、且又十八日以後書付之仕置面々へ被差出旨、並支配之分も右同断可

(九丁目裏)

相心得御觸御中  
通達候、以上、

十二月四日

御帳付且御干鯛一折肝煎番へ名書目録を以て  
差入候、尤御帳ハ若殿様  
御祝儀申上候、

申上覺

私儀来年頭三日御禮<sup>也</sup>此節病氣ニ付、難罷出御座候御触ニ付、此段申上候、以上、

久次米兵次郎

名乗書判

森  
平馬殿

篠山 夷則殿

足助弾兵衛殿

(一〇丁目表)

鵜飼七郎左衛門殿

篠山伊左衛門殿

津田 叶殿

郷司伊兵衛殿

一ゆか 御目見、

一苗字替名替又ハ名文字替、

一須本・江戸・京・大阪住之面々、御國住被仰付候類、

一亡跡家督等被仰付候類、

一嫡子病死又ハ退身之類、 以上、

一老體幼少 痛所等有之御勝手御禮奉願候義、来

(一〇丁目裏)

る廿日迄面々迄可願出事、

一江戸其外他國へ罷越住申面々、又ハ御用引病氣幼

少産穢差合、其外子細有之、不罷出面々ハ書付取揃

御差入、来る十八日差出可申候、右日限以後□罷出

義出来候ハ、早速書付面々迄、直差出可申事、

但指合其外御舟難罷出面々ハ、其段 〆書付

を以可申出候、尤御禮被為受候日限迄二御急被

仰付候ハ、早速書付を以可申出候、

一無格並諸職人市郷之者共御禮申上来候者共、去ル

酉年之通可相心得事、

(一一丁目表)

右ハ御目付〆申来候旨、御普請奉行觸御代官〆  
達、

先月十四日御名代戸澤能登守様御登城被成候所、

甲州川々御普請御用御勤被遊候二付、御時服御拜

領、諸事無御滞被為濟候、恐悦二付十三日御帳付御

賀申上候様御觸達、 十一月八日、

先月廿一日御上使諏訪縫殿助を以而、

御鷹之雁 若殿様御拜領被為遊、右二付、来る廿三

(一一丁目裏)

日御帳付御賀申上候様御觸到来、 十二月廿一日、

今度從

公儀古金銀其外引替之義二付、別紙之通御書付御

渡相成候、依之御國中可被相觸旨被仰出候條傳其

意、每例之通可被申觸候、尤支配之者へも相達候様

可被申聞候、以上、 十二月

大目付へ、

古金銀草字式步判古式朱銀壹歩金等引替所之儀、

當戌十月迄被差置候段、去る年相觸候所、今以引替

(一二丁目表)

残有之候間、引替所之義尚又来亥十月迄是迄之通

被差置候條、古金銀所持之者共、來亥ノ十月限急度引替可申候、

一草字式歩判並文政度吹直式歩銀之義も追而通用

停止可被仰出旨、去る年相觸候趣も有之候間、所持之者ハ、後藤三右衛門銀座役所並江戸・京・大阪、其外夫々ニ而當時引替御用相勤候者之内へ、夫々差出引替可申候、

右之趣、遠國末々迄 相心得候様御領ハ御代官

私領ハ領主地頭ハ入念可被申付候、以上、十二月

(一二丁目裏)

廿一日達

太守様兎角御痔疾御趣御難洪被為遊候二付、但州城崎御湯治之義御願書御差出被成候所、御願之通被為濟候條、此段御家中一統奉承知候様、各々可有進達旨、御目付中申達事、 正月廿七日

御家中之面々他國ハ罷歸候砌、大坂へ参合候共、御関船乗ニテ罷歸候節ハ、御仕置へ案内之義ハ歸着之 迄申述候得共、以後者御関船へ便乗ニテ

(一三丁目表)

被歸候へハ、其段も案内有之候様可有之候、右之趣各々可有通達旨御目付中申達事、

覺

此度但州城崎為御湯治被為人候二付、來月五日御乗船被遊候、依之御家中之面々御見立申上旨之儀

御參勤之御趣之通、驚之御門筋へ罷出列居御目見可申上候、且又船にて參勤之義差留候條、下々迄可申付候、尤支配之者へも相觸候所、各々可有通達候、 二月廿六日

此度御湯治御留主中式日御禮之儀、登城仕御帳付

(一三丁目裏)

退出仕候様、各々可有通達旨御目付中申達事、

右御觸三ヶ條共、二月廿七日達、

右御乗船五日已刻之所御都合之義有之、卯刻御發駕被遊旨、四日申刻島觸到来、 三月四日

但州表へ十七日御著被遊候二付、廿二日帳格迄御機嫌奉伺旨、御帳付島觸、

左御歸国之節、驚御門筋へ罷出候様、書加へ有之、

三月廿一日、四月十日未刻限前御着承御帳付有之候事、

(一四丁目表)

蜂須賀堅之丞病死仕御續合二付、廿二日一日御遠處被遊候二付、廿三日 太守様奉伺御機嫌旨御仕置宅へ肝煎番之者罷出候様御觸 四月廿二日・廿三日着、

尾張大納言様先月廿六日御逝去被遊候二付、半減之忌服被為受、十二月一日作事留、十四日迄穩便、廿

三日若殿様御機嫌伺御仕置宅肝煎番之者罷出申

上候様、右同日觸、

當六月御巡見使到著、

公儀御代替二付、御拜領之御判物、今月朔日到着、十

(一四丁目裏)

九日御頂戴仕候二付、 太守様・若殿様・若御前様へ

御賀申上候様、廿三日御帳付有之旨御觸、四月十九

日御代官分達、

太守様道途益御機嫌能、今月十四日到江府御着座

被遊候、此段御家中諸士可申聞旨被仰出候條、得其

意例毎之通可被申觸候、右二付、

太守様 若殿様 若御前様へ御賀之儀、来る廿九

日四ツ時分ハツ時迄之間登城仕御帳付申上候事

二候條、此段も一統相心得可被申觸候、以上、

(一五丁目表)

亥九月廿六日

御参勤二付、来る廿三日未刻御乗船被遊候、依之一

統前々之通、

御目見可罷出候、並二船二而奉拜之儀指留候條、下

々可申付候、右之趣得其意例毎之通可被申觸候、右

之内支配之者共へも相達候儀、可申聞候様、可被申

達候、以上、

亥八月十五日

今度御参勤之御禮、御腫物御不出来二被為在候二  
付、先月十九日御使者稲田八郎左衛門を以而御献

(一五丁目裏)

上物相濟候、此段得其意例毎之通可被申觸候、且右

二付、 太守様・若殿様・若御前様へ御賀之儀、来

る十三日四ツ時分ハツ時迄之間登城仕御帳付申上

事二候條、此段も一統相心得候様可申觸候、以上、

十月八日

右支配頭分御觸来る、

御鷹匠御徒士御壹所人小奉行格之者共、近頃何と

なく万事仕成向等小性日帳格等に等しき様之儀

も相聞へ、尤聡と御役等も相勤、且老輩之者等ハ、孰

れも御取立等も被仰付候内にて、不辨之者も有之、

(一六丁目表)

其内にて、中小性日帳格等同輩之様相心得候族も、

有之哉二相聞、座上途中禮節二於ても、不當之次第

も折々相聞へ、別して不心得之事二候、以後萬一心

得違之者も於有之ハ、御沙汰二可被及候間、支配頭

之面々得相心得程、マツ申聞候様被申聞義、可有了簡

旨御目付中申達候事、

亥八月九日

相達、

覺

一御法事刻限

九日卯上始申刻終、

十日卯上刻始申下刻終、



一組頭寄合組御鉄炮頭御香奠、

(一六丁目裏)

銀五分宛 以下諸士中御香奠銀三分宛、

一組頭寄合組之嫡子ハ御香奠親同然指上御寺ヘ可

相詰候、右之外嫡子等も御寺ヘ相詰御香奠銀三分

宛可指上候可指上候、尤小奉行格ハ御寺ヘ相詰不

及御香奠銀三分宛持參可指上候、

善性院様一周御忌御法事、今月九日・十日両日於興

源寺ニ御修行被仰付候、其節御家中諸士ハ早々御

寺ヘ相詰可申候、御法事刻限御香奠員数とも別紙

之通り二候、

右ニ付輕罪之者有之候者指免可申候、右御法事之

(一七丁目表)

間御家中火之要心猶以堅可申付候、尤此段支配之

者共へも相達候様、可被申聞候、十月二日

左之株々去戌七月朔日今當亥六月廿九日迄夫々

月日書付御用候條、觸口中御通達書付御取揃、来ル

十二日迄 御城ヘ可被有御指出候、以上、

七月三日

一家督 一向後名代 一父子御宛行振替 一立身

一被召出 一御加増 一家屋敷拜領 一御用名代

一高御減少 一格式御引下 一骨折被仰出亦者御品被下候類

(一七丁目裏)

右着具毛付指出并相改候品有之已前差出候、毛付

之表ニ致相違候類、萬一指延引之面々有之候得

者、早々指出候様可被通達候、以上 七月三日

右之通御目付中今申来候旨、御普請奉行之面々今

申来候二付、書寫相達候條、先々無滯刻付を以て順

達、右株々之内ニ相當り候義有之候ハ、書付来る

九月迄ニ御指出可有之候、且廻状相濟方今御役所

ヘ御差戻し可有之候、以上 七月八日

風荒吹申時節二候間、御國中火之心猶以堅可致

(一八丁目表)

申觸候事、

一兼而被仰出候御法度之趣並儉約之義衣食を始め

萬事驕奢花麗之儀無之様可相慎事、右之通堅可相

守旨、猶又被仰出候條得其意、例毎之通可被申觸候、

尤支配之者、次ニ末々迄入念申付候様可被申聞候、

以上、 十月朔日

今度從 公義古金銀引替之義ニ付別紙之通御書

付御渡被成候、依之御國中可觸知旨被仰出候條、得

其意、例毎之通可觸知候、尤支配之者共へも相達候、

(一八丁目裏)

様可被申聞候、以上、 十二月十八日

大目付江

古金銀真字式歩判古式朱銀等引替所之儀、當亥十月迄被指置候段、去戌年相觸候所今以て引替残有之候間、引替所之義尚又來子十月迄者是迄之通被指置候條、古金銀其外所持之者ハ來子十月限急度引替可被申候、

一草字式歩判并文政度吹直式朱銀之義も追々相觸候通、所持之者ハ早々引替可申候、

一壹朱金銀通用之義、來る子十月迄者只今迄之通被

(一九丁目表)

指置、其以來之通用可為停止候間、所持之者ハ早々指出引替候様可致候、尤停止已後通用いたし候者於有之ハ急度可申付候、

一新金銀吹立追々出來二付、文政度吹直金銀所持之者ハ彌引替所へ指出引替可申候、追而右金銀も通用停止可被仰出候間、其旨急度相心得貯置、此節精出引替可申候、

右之通、遠國所々迄相心得候様御料者御代官、私領ハ地頭今入念可被申付候、 十月

右者御普請奉行ハ觸達候、

(一九丁目裏)

一嫡子御雇并見習被仰付、亦者御免 一名替

一他國御使者其外他國御用被仰付乗船罷歸候月日共、但何々之御用二而罷越候旨可相認事、

覺

私儀、以戌八月十三日藍方勘定役被仰付役中小奉行格被仰付、勤中御支配壹名御増被下置相勤罷在候御觸二付、右之段申上候、以上、

亥七月九日

富永五左衛門

直幸(花押)

枝川 万藏殿

(二〇丁目表)

高井 雄藏殿

庄野太郎兵衛殿

一定御役儀亦者御役替并御免月日とも、

一當分諸御用加等被仰付并御免月日とも、

一在江戸亦者立歸江戸乗船並罷歸候月日共、但無役にて罷越候上、於彼地二何御用相勤候事、立歸江戸何御用相蒙候事、御供不時共、以上、

一家督向後名代嫡子初て御目見、

一幼少之本人十五歳二至候面々、

但十五歳以下者勝手次第、

(二〇丁目裏)

今度從 公儀大判吹増之義二付、別紙之通御書付

御渡被成候、依之御家中可觸知旨被仰出候條、得其

意例毎之通可被申觸候、尤支配之者共も相達候様

可被申聞候、以上、 八月廿一日

大目付

大判之義、享保之度吹改後數年相立焼失等にて減少候ニ付、此度吹増被仰付候間、新古取交無滞可被通用候、

右之趣可被相觸候、以上、 六月

(二丁目表)

覺

一御代々様分左之株々追々可被遊御覽候條所持仕候面々ハ、左書目錄之通於 御城ニ御年寄之面々へ指出可申、左寫被仰付相濟次第返被下候、尚又日限之儀ハ追て可相達候、且支配有之面々者支配頭へ取都可指出事、

一其家ニ當被下置候、

御直書且御直ニ無之とも御結構之御趣意にて御直判有之御書類、

一其家ニ當り不申共 御直書之分、

(二丁目裏)

一右之外ニも指出方難心得 御書類有之候得者、指出候節、御年寄江相尋指圖次第、追て指出候とも、又者其節持参候て差圖之上指出候とも、勝手次第候事、

右  
御書類之裏手ニ少自分姓名相認張付置一卜箱ニ都メ可指出、尤箱ニも姓名相認可申事、  
但、表装等仕置候分ハ其儘可指出候、

一御判物所付、  
一御役割、

(二丁目表)

一御詩歌御一行物之類、

右株々者御用ニ無之ニ付、指出ニ不及候事、  
一江戸其外他國御用ニ罷越居候面々ハ罷歸候上、指出方御目付之面々江尋出候事、

一御普請奉行始高取諸奉行、右者十一月十六日同十八日迄ニ差出候事、

一無足諸奉行日帳格、右者十一月廿六日同廿八日  
まで指出候様、

一支配付之面々、右者十二月朔日同三日迄指出候事、  
十月晦日

(二丁目裏)

御家中

御判物被下之義已前御中絶ニも相成、御家老分相渡置候假證文之俣知行いたし来り候面々之義御判物被下候事ニ候、然所未だ御判物モ御直不被下向も有之哉ニ相聞、依而右様之假證文所持之面々者、本紙ニ寫相添、来月十五日迄ニ御年寄月番宅へ差出し候様、各々可有通達旨御目付中申達事、  
但、支配付之者共ハ其頭々へ取都可指出候事、  
一江戸其外他國御用ニ付罷越居候面々者、罷歸候上、早々差出方御目付之面々へ尋出候事、

(二三丁目表)

一 寺社之義も前同断之事、

但、町御奉行、御郡代とも、

一 両都御留主居之義者、罷下候節指出候事、

十月晦日

覺

火之用心之義、度々被仰出候義有之、當冬向者火沙

汰も先少く候段、全人々厚相心得罷在候故之義と

相見候得共、追々風立候上、雨遠く、且者月迫二も押

移候事二候得者、御家中始市郷とも此上踊厚心を

(二三丁目裏)

付名聞ケ間敷不相成巨細二行届火之本大切二仕

候様、無油断下々二至迄重々可申付候、右之趣御家

中、且寺社へも不相洩様被逐通達、支配之者共へも

相達候、将又市郷之者義ハ町奉行、御郡代へ篤卜

被申聞義可有料簡候、以上、十一月晦日

今度

公儀御代替二付、御拝領之御判物無滞、今月朔日到

着、今日御頂載被遊候御事二候條、可奉恐悦候、此段

御家中一統奉承知候様可被相觸候、且右二付、

(二四丁目表)

太守様

若殿様

若御前様へ御賀之義、来ル廿三日四ツ時分八ツ時

迄間二於 御城御帳二付申上候事二候條、此段も

一統奉承知候様、可被相觸候、以上、四月一九日

御勝手方御行迫二付、此度無御據歩懸被召上之御

趣意之義ハ、委曲頃日相達候懸二候得共、御家中之

面々御年限中儉約相守取續可申事二候得共、小祿

之面々二於而ハ地盤餘有も無之義故難洪可仕、依

(二四丁目裏)

之御藏米高百五拾石以下無足末々迄御宛行書入

有之候、借財利息之義、去る外年之引合を以て相書

之通、御年限中利減被仰付候條重々質素二相暮、不

都合之義無之様相心得度事、

一 御藏米高百五拾石分無足以下末々迄右之御宛行

之内書入令借銀有之候、利足之内御年限中六厘減

少被仰付候事、

但、譬ハ地盤老歩之利息二候得者、九朱四毛二相

成候割合二候事、

右之趣、御家中可有通達候、并無格末々之者共ハ更

(二五丁目表)

二 支配頭分相達候様、且町御奉行、御郡代、御藏奉行

新御藏奉行之面々へも被申聞儀可了了簡旨、元々

中申達事、八月廿六日

深川御屋敷之内、先々年御領地二相成候御場所今度

右御屋敷へ御指加之義御願之通相濟候條、此段御家中一統可承知旨申達候事、霜月廿四日

左之通、當職被申聞候條、同島中急々被相觸候、以上  
亥十二月廿六日

(二五丁目裏)

覺

今月十八日御登城之所、格別之思召を以て被叙正四位上候旨被為蒙仰候條、可奉恐悅候、依之御家中諸士、明後廿八日五時〆九ツ時迄之間登城御帳ニ付當職へ相謁、

太守様 若殿様 若御前様へ御賀可申上候、尤御鷹匠御從士御台所人小奉行格之者共義、夫々支配頭出席右同断相謁御賀可申上候、謁方御場所等之儀ハ御目付之面々可承合候、右二付

太守様 若殿様 若御前様へ為御賀左之通肝煎

(二六丁目表)

番之者名面目録を以、於御城御奏者懸合可指上候、若御前様へハ奥懸御目付へ懸合差上候様可被相達候、尤池田三名士之義ハ、右御賀惣代一人罷越干鯛一折宛別而名書目録を以、右同断懸合差上候様可被申聞候、右之趣早々可被相觸候、以上、

亥十二月廿六日

太守様江

干鯛二折 組頭寄合組列而、  
同 一折 物頭列而、  
同 一折 組頭寄合組物頭嫡子其□二列而、

(二六丁目裏)

同 一折宛 寄合席〆小奉行格迄格二列而、  
同 一折宛 寄合席〆日帳格迄嫡子格二列而、  
若殿様 若御前様へも夫々右同断、  
但京大坂居合之面々差上候事、

此砌、支配頭出席二而そてつ之御間にて御書付被讀渡候、肝煎番相勤候、

左之通、當職被申聞候、同島中急々可被相觸候、以上、  
十二月廿九日

覺

(二七丁目表)

今度御位階御昇進二付 太守様 若殿様 若御前様へ為御賀御兩國諸士惣代生駒右近差上達御聞義、随而格々肝煎番之者一兩人宛、来る正月三日當職宅へ罷出御賀可奉申上候、此段御家中可被相觸候、尤池田三名士之義ハ為惣代一人罷越候様、被申聞義可有了簡候、以上、  
十二月廿八日  
右御昇進之御禮舊臘廿五日首尾克被仰尽二付、御賀之儀十三日御帳付可申上旨、御觸有之、

正月八日

舊臘廿五日御登城御位階御昇進之御禮御首尾克

(二七丁目裏)

被仰上候條、此段御家中一統可奉承知、右之趣得其  
意例毎之通可被申觸候、右二付 太守様 若殿様  
若御前様へ御賀之儀、来ル十三日四ツ時より八ツ時  
迄之間登城御帳二付、可被申上事二候條、此段も一  
統相心得候様、可被相觸候、 子正月八日

覺

今般御位階御昇進二付、為御賀御両國諸士惣代生  
駒右近差上、

太守様 若殿様 若御前様へ達御聽候旨、右近申  
出候間、此段一統可奉承知申相觸候事二候、依之御

(二八丁目表)

請之義夫々肝煎番之面々、来る七日當職宅へ罷出  
申上候様、可有通達候、尤池田三名士之義為惣代壹  
人罷越候様、申聞方之義可有了簡候、以上、

三月朔日

古和喜右衛門

富永五右衛門様

今田又右衛門様

覺

市郷之者共近來諸士往来并渡舟乗組川舟乗違等  
之節、無禮法外之者有之、且穢多非人共往来町人百

(二八丁目裏)

姓二相紛片寄候體も無之趣二付取究向之義、別紙  
之通可申付旨、町御奉行・御郡代之面々申渡候條、右  
様相心得候様、御家中并寺社へも被遂通達、無格末  
末之義も相心得候様、其頭々より屹度可申付由各々  
可有通達候、以上、 亥七月十日

一市郷之者男女二不限、左へ相付往来仕候義者勿論  
之義二候所、近來心得方薄者多相見如何之事二候、  
第一諸士と見受候得者、往違片寄候心得二て、往来  
仕候様相心得可申事、

但郷分馬牽居申者并市郷荷擔之者杯ハ尚以片

(二九丁目表)

寄候様相心得可申事、

一町人共暑サ之砌、店崎并往来縁等二腰懸様之物指  
置不作法之仕来有之、且諸士往来之體も見受候て  
も、不行儀二罷在候様、相見如何之事二候、向後右様  
猥の義無之様相心得可申事、

一郷分之者先達て 論長綱にて馬牽候義ハ、難相調  
候所、心得違之族間々有之様相見、向後右様之義ハ、  
屹と無之様第一御山下二てハ馬之口を引付往来  
仕候様、相心得可申事、

一市郷之者共渡舟二乗候節、帶刀人乗組候得者、早々

(二九丁目裏)

つくばひ罷在筈二候所、心得違之者多有之様相見  
候ハ、御山下渡舟二乗候得者、假令諸士分乗組不申

迎もつくばい居候様、急と相心得可申事、

但大勢乗居申節、跡込乗候儀ハ、屹度仕間敷事、  
一市郷丁稚陸尺之類渡舟二而、不作法之體有之渡守  
合遠慮之義申聞候得共、却て立腹仕候體杯も相見  
如何之時候、右様之義無之様召仕之主人合急と厚  
申付候様、相心得可申、

一川舟乘市□之義、船頭共常々厚相心得船込之節、諸  
士之船と相見受候得者、乘行候義、遠慮仕乗當候義、

### (三〇丁目表)

無之様相心得可申事、

一舟着場之義、人々勝手而已を考不心得之仕方毎々  
有之候、於て除合乘着候様、相心得可申候事、

一穢多之義ハ天保二卯年取究有之候二付、右ヶ條書  
を以て猶又同断厚相心得候様、且諸士ハ勿論百姓  
町人二対し候ても、無禮法外之義無之様片寄往來  
仕候義、相心得可申旨、穢多頭共へ可申付事、

一非人共之義も右同年取究有之候二付、右同断非人  
頭共へ可申付候事、

一右之通、市中者大宿老合丁々役人共へ相達、小借家

### (三〇丁目裏)

之者共迄も不洩様懇々申渡并非人共之義ハ、頭合  
御手許重々取究申付郷分ハ組頭庄屋共合村々役  
人共へ申付、役人共合百姓并穢多非人二至迄不洩  
様申渡、且丁村役人共二於ても平素無油断心を盡  
し、もし不心得之者有之候得者、屹度咎可申付旨申

渡候事、

天保二卯年町御奉行・御郡代於手許掃除穢多非  
人等心得方之義申付候ヶ條書寫、

一掃除并穢多共之義、近來風俗相流奢ヶ間敷百姓町  
人二相紛法外之不心得者も有之、第一女共不相應

### (三一丁目表)

之着類相用候趣相聞、重々不屈之事二候、向後身柄  
之程を相辨質素二相慎可申旨、心得方屹と可申付  
候、其上如何之仕成於有之ニ無手當可申付事、

一惣而谷非人共近頃町人トル吉凶之義二付、遺物之  
義不足ヶ間敷相貧過言等申、彼是心儘之仕成有之  
趣二付、諸人憐を以て今日を相送り申義二候得ハ、  
右様二者無之筈之所不屈之仕合、此後右様之義於  
有之者嚴敷可申付事、

一頭共并平非人男女共此後着類無地無紋帶同断着  
可仕事、但毛綿太布類、

### (三一丁目裏)

一頭并平非人男女共羽織・足袋・雪踏指留候事、  
一雨天之節、竹子笠蓑、右外一切雨具指留候事、

一女非人髮諸人二不相紛様取上髮二仕、左櫛之外指  
留候事、 但、木綿相用可申候、

右ハ非人共市中ニ罷出心候ニ有之、第一男女共分  
際を相忘、着類取繕諸人二相紛候様有之趣不屈之  
仕合二候、依之右之通此後申付候義二候、以上、  
相背者於有之候者、科可申付候、右之段非人共へ急



度申付候様同心杖突へ申渡候事、

天保十亥年十月朔日

(三三丁目表)

一 四月廿一日御服被為蒙仰候上人御所様御卷物其  
外御拝領被為有、尚又 右大將様分断御卷物御  
拝領被為有恐悦二付、来ル六日四ツ時分八ツ時迄  
之間御帳付御三方様へ御賀之儀可申上吉御觸到  
着、 子如月二日

一 四日御歸城も近寄候二付てハ御着、翌日御日帳格  
迄之間、例毎之通御目見被仰付候旨、御着之上御觸  
達ニ相成候筈二候所、難行由二付、前廣御達ニ相  
成候旨島觸到着、

(三三丁目裏)

一 御着之砌、鷺之門筋へ罷出御目見可仕旨并船に  
て奉伺之義御差留之旨、且支配者へも相達候様  
御觸書到着、 子五月七日

一 暉姫様御逝去被遊候二付、 公儀御穩便被為在候、  
依之今廿二日普請御差留、来る廿四日迄三日之間  
穩便、

覚

一 御家中之面々式日五節句、不時御帳付等二付出仕  
之節、右御帳前へ出席之御奏者小目付御日帳坏へ

(三三丁目表)

自分之挨拶時宜合等も有之哉ニ相聞候、假令是迄  
之成来二候へとも、御用二付罷出面々へ對し右  
様ニ仕成ハ有之間敷事ニ候條、此段被心得置、寄々  
通達可有旨御目付中申達候事、  
右者御普請奉行分觸来候事、 子六月九日

御家中之面々湯治始他国養生等願之通被仰付罷  
成候内、御參勤御歸國之御比罷成候向も端々有之  
哉相見へ已後人々心得も 度事ニ候條、比段各  
分可有通達旨御目付中申達事、 五月廿二日達

(三三丁目裏)

御家中之面々四月分九月初迄、足袋着用不相調  
旨、寛政十年年相達、一統相心得罷在候義、且疼足等  
ニテ足袋相用度面々ハ、御目付迄申出、尚又相調候  
得共、已後ハ身分へ當改御前へ罷出候節ハ、兼て申  
出有之候とも、四月分九月初迄ハ相用不申様可  
相心得候、尤疼足等にて無扨相用不申てハ不相成  
砌ハ、其時至尚又御目付へ申出相用候様可仕候、右  
之通相心得各分寄々可有通達候、以上、

子五月廿四日

六月二日達

御家中始惣て舟たて候場所之義ハ、是迄御取究無

(三四丁目表)

之ニ付、所々最寄之川筋洲續家近等にて右取扱仕  
火之用心ニも相懸候二付、向後御山下之義ハ屹と



差留候、尤南ハ築地前洲并沖湊東浦、北ハ田宮非人渡場ハ北川筋ニ於て舟たて可申候、依之右ヶ所へ札建置候間、心得違等無之様、御家中寺社ニも被逐通達、無格末々之儀ハ、支配頭々申付候様、且市中厚以申付方之儀ハ町御奉行・御郡代へも各々可申聞旨本々申達事、子六月十七日 十九日達

太守様御疹所御不出来ニ被為在候ニ付、摂州有馬、

(三四丁目裏)

御湯治御願之通、被為蒙仰候ニ付、御家中一統奉承知候様御觸有之、子八月十日

此度摂洲有馬為御湯治被為入候ニ付、来月十四日卯刻御乗船被遊候、依之御家中面々御見立申上方之儀ハ御東勤之御砌之通、鷺之御門筋罷出列席御目見可仕候、且又船ニて奉送之儀差留候條、下々可申付候、尤此段支配之者共へも相達候、夫々可有通達候、以上、

此度、御湯治御留主中重陽并式日御禮之義登城仕、御帳付退出仕候様、各々可有通達旨御目付中申達

(三五丁目表)

候事、子八月廿四日 右両條共廿七日達、此度、為御湯治来月四日御乗船可被為遊所、御都合向も有之、十日過迄御延引相成、猶又日限等之儀ハ追而被仰出旨、九月十一日未刻御乗船被遊旨御觸到来、此砌御張付なし、右御觸八月廿九日達、

家中相撲取菊ヶ濱弥吉、此度御祝義相撲興行願之通申付候、隨而御家中之面々御役付之外ハ見物不苦候、且二男三男等ニ至迄行義宜仕がさつヶ間敷義、猥成義等無之様、去る申年申達候通、可相心得候、

(三五丁目裏)

此段各々御家中一統無屹度通達候義可有之旨御目付中申達候事、

若殿様先月廿三日御上使内藤右近殿を以て御鷹之雲雀御拜領被遊候ニ付、御賀之義、来る十三日御帳付申上旨御觸、子九月十八日

一壺朱金引替之義、亥十月限二候所、當子十月限通用停止候旨、公儀觸之旨御觸有之、子九月十九日達、

(三六丁目表)

太守様今月十七日申刻御機嫌能有馬へ御着御座被遊候條、此段奉承知、可奉恐悦候、右ニ付御三方様へ御賀御機嫌伺之儀、来る廿五日御日帳格迄御帳付可申上旨、且又御帰城之御砌、御乗船之通鷺御門筋へ可罷出御目見可仕旨并即刻於御城御帳付御賀可申上旨、島觸有之候、子九月廿二日未上刻到来、

先月十三日為上使内藤左近殿を以て、若殿様御鷹之雲雀御拜領被遊候御賀、来る十三日御帳付御觸、

(三六丁目裏)

御臺様御不例之所、不為叶御養生、先月廿四日薨去  
二付、普請鳴物停止候、尤日敷之儀ハ追而可被仰出  
旨、且火之用心堅可申付旨御觸有之、 子二月十六日  
右薨去二付、普請来る十一日迄鳴物ハ十九日迄穩  
便ニ可罷在旨、 □二月七日島觸<sup>(マ)</sup> 追て仕置候、

富田御屋敷於矩様事、 太守様□□々育被為在量  
姫様奉稱十四日同御引越二付、十八日御賀御帳付、

先般御昇進二付、年頭御目見之節、居殘御赤飯被下

(三七丁目表)

旨島觸、 子十二月廿八日

三日そてつ之御間ニおいて御赤飯頂戴、其節支配  
頭出席右御禮御城可申述候、支配頭ハ御仕置へ右  
御禮申上筈之事、

舊臘十六日、伊奈熊藏殿を以、 若殿様御鷹之雲雀  
御拜領、九日御帳付、 丑 月二日

若殿様御機嫌よく御越歳被為遊、御例之通御禮御  
首尾よく被為濟恐悦二付、来る廿五日御帳付、

(三七丁目裏)

丑正月廿日

御位階為御祝儀、来る八日・九日御觸謁見被仰付旨、  
八日高取、九日無足以下、右為御□肝煎面々者御仕  
置宅へ罷出候、猶又謁見後、来る十六日御礼御帳付  
御觸有之、 閏正月六日

大御所様御不例之所、不被為叶御養生、先月晦日薨  
去被遊候旨、江府ハ申参候、依之御國中普請鳴物差  
留之穩便可罷在候、且

(三八丁目表)

先月廿一日為

上使山岡十兵衛殿を以て御鷹之雁御拝領被遊候  
間、可奉恐悦候、此段御家中一統奉承知候様可被相  
觸候、且右二付、 太守様 若殿様 若御前様御賀  
之儀、来ル十八日四ツ時ハ八ツ時之間、於御城御帳  
付申上事二候條、此段も一統相心得候様可被相觸  
候、 十二月十二日

此度摂州有馬へ御湯治被為入候二付、来月四日御  
乗船被為遊旨被仰出有之候所、御都合ニヨリ被為

(三八丁目裏)

在来月十日過込御乗船御延引被為遊、尚又御日限  
之儀ハ追て被仰出候條、此段各ハ可有通達旨、御目  
付申達候事、

市中相撲取菊ヶ濱彌吉、此度御祝儀相撲興行願之

通申付候、隨て、御家中之面々御役付之外ハ見物不  
苦候、但二男、三男等ニ至迄行義宜仕、かさつケ間敷  
義猥成義等無之様、去ル丑年申達候通り可相心得

候、此段各々御家中一統寄々無洩通達之儀可有了  
簡旨、御目付中申達候事、 子八月廿七日

(三九丁目表)

火之用心之儀、毎々被仰出一統厚相心得油断も有  
之間敷候得共、舊冬以来□少朝も絶、且春ハ毎度大  
南風大西等も吹候事二候得ハ、猶又厚火之用心取  
究無之候而ハ不相成候間、孰も深切ニ心を用嚴敷  
火之用心之義、相守候様被仰出候條、得御意例毎之  
通可被申觸候、尤支配之者次ニ末々迄入念申付候  
様可申觸候、以上、 丑正月廿六日

今月五日為上使市橋内膳殿を以て御鷹之雲雀

(三九丁目裏)

若殿様御拝領被遊候間、可奉恐悦候、此段御家中一  
統奉承知候様可被相觸候、右ニ付、 太守様 若殿  
様 若御前様御賀之義、来る廿五日四ツ時分八時  
迄之間、於御城御帳付申上事二候條、此段一統相心  
得候様可被相觸候、以上、 子八月廿日

太守様御痛所鬼角御不出来ニ被為在候ニ付、摂州  
有馬御湯治之義、御願書御指出被成候所、御願之通、  
被為濟候條、此段御家中一統奉承知候様、各々可有

通達旨御目付中申達候事、 子八月七日

(四〇丁目表)

此度有馬御湯治御乗船之義、来る十一日未之刻御  
乗船可被遊旨、御治定被仰出候條、此段各可有通達  
旨、御目付中申達候事、 子九月

覺

此度摂州有馬為御湯治被為入候ニ付、来月四日卯  
刻御乗船被遊候、依之御家中之面々御見立申上義、  
御參勤御御之通、驚之御門筋へ罷出、列居御見立可  
仕候、且又船二而奉拝之義指留候條、下々可申付候、  
尤此段ハ支配之者共も相達候様、各々寄々可有通  
達候、以上、 八月廿四日

(四〇丁目裏)

此度御湯治御留主中重陽并式日御礼之義、登城仕  
御帳付退出仕候様、各々可有通達旨、御目付中申達  
候事、

覺

御家中諸士并無格御奉公人共兼て勝手方不如意  
之面々有之所、去る戌年觸達も被仰付通り、上ニも  
彼是御物入御仕送り方御差支ニも相成候御場合、  
無御處步懸被召上候ニ付、差當暮方行足不申面々  
ハ、猶以借財相増、且右借銀之中ニハ、成拂之期も不

(四一丁目表)

相見、永年御宛行被行取候姿ニ相運候株も有之候、是等之義、双方孰談とハ被申、如何之仕成ニ相通不心得之事ニ候、前現之懸行詰候場合、近年諸物高直ニ付而ハ、尚更行迫、御奉公も難相勤向も有之目前、只今之程御備ニも相懸別て不安事ニ付、未歩懸御年限中ニ候得共、何卒思召を以て御評議被仰付候得共、莫大之金高當時之御勝手分御出所之道更ニ無之種々御評議詰之所、大阪御銀主共へ調達御頼入被仰付、愛元市郷御銀主共へも調達被仰付候得共、中々難行届候ニ付、別て恐多候得共、御要用之御

(四二丁目裏)

引除置御下奉願、右彼是を以て假成ニ仕解見込も相立候ニ付、近々手懸被仰付旨被仰出候條、借錢方之委曲精々取調へ不都合之義等無之様、相心得御藏奉行之面々江書出候様、相心得可申候、随而右仕解方ニ付、追々銀主共行着ニも相成候ニ付、大小迷惑も可有之事故、容易ニ可被仰付義ニハ無之候得共、前現之次第御抱置も難相成、不得已事手懸被仰付事ニ候、依之平常之暮方心得等屹と取究不申候而ハ、此度被仰出候御趣意相悖、甚以如何之次第第二付、質素儉約之儀ハ別段被仰出義ニ候條、重々無油

(四二丁目表)

断相心得候様、各々御家中可有通達、並無格御奉公人共へ支配頭分夫々相達候様、被申聞義可有了簡

候、以上、 丑二月四日

覺

此度御家中借金仕解被仰付候間、頃日觸達候懸ニ有之、中々右之所へ御手被仰付候様之御勝手方ニハ無之候得共、御備向ニも相懸可申ニ付、格別之御評議を以、件之通被仰付候事ニ候、随て近年一牧驕張質素儉約之義ハ相流、別て如何之事ニ候、只今之懸ニてハ借銀仕解被仰付候、御趣意も以後屹度取

(四二丁目裏)

改前々觸達之通相心得、内外之奢を相省、非常之備厚相心得候様、各々御家中可有通達、並無格御奉公人共ハ支配頭分夫々相達候様、将又市郷之義も御家中之面々右之通儉約被仰付候ニ付てハ、愈以て不都合之義無之様取究之義、町御奉行、御郡代江も被申聞義、可有了簡候、以上、 丑二月廿二日

覺

一 御法事刻限 十五日卯刻始申刻終、  
十六日卯刻始申刻終、

一 組頭寄合組御鎮炮御香奠銀五分宛

(四三丁目表)

右以下諸士中御香奠銀三分宛、  
一 組頭寄合組之嫡子親同然差上御寺へ可相詰候、右之外嫡子中御寺へ相詰御香奠銀三分宛可差上候、

尤小奉行格ハ御寺へ相詰ニ不及御香典三分宛持  
參可差上候、以上、

鳳臺院様百回御忌御法事、今月十五日・十六日兩日  
於興源寺御修行被仰付候條、御家中諸士交々御寺  
へ相詰可申候刻限、并御香奠員数別紙之通り候、

一御法事之間、御家中火之要心猶以堅可申付候、尤此  
段支配頭之者へも相達候様、可被申聞候、右之趣得其

(四三丁目裏)

意例毎之通可申觸候、 丑十月八日

御家中之面々、此度御仕解被仰付候ニ付、為御禮格  
々肝煎番一兩人宛御仕置月番宅へ罷出可申上旨、  
支配之者共之儀ハ、支配頭合同断可奉申上旨御觸  
有之候、 丑十月十日

今度從 公儀高直之品賣買、來寅年今停止ニ付、惣  
て花美高價之品詔申間數旨、別紙之通御書付御渡  
被成候、依之御國中可觸知旨被仰出候條得其意、例

(四四丁目表)

毎之通可被觸候、尤支配之者共にも相達候様可被  
申聞候、以上、 丑十二月廿二日

大目付へ

一不益ニ手間懸候高直之菓子料理等向後無用ニ候、  
是迄拵來候共相止可申事、

一能装束甚結構成も相見候間、向後手輕之品相用可  
申事、

御入国為御祝儀諸士并市郷御目見人御  
料理被下、

(四四丁目裏)

二汁五菜

鯛 生姜 雁 いちよ大根

鰯 汁 ささらき牛蒡

栗 九年甫 たたき菜

奈良漬瓜 いせ海老

香物 坪 飯

澤庵漬大根 房菜

二

苞くすし 藻魚

平くわい 汁 焼物 小鯛

人ちん 短尺青昆布

塗盃片木ニ而人数程引

鯉氷り

煖酒 皿 重引 酒麴

大根

(四五丁目表)

やうかん  
組合菓子 粕ていら  
ミかん  
市郷御目見人へ

鰯 栗 雁 輪大根 奈良漬瓜  
せうち 汁 飯 香物

九年甫 打菜 沢庵漬大根

いせ海老 笹崩

坪 坪 くわい 煖酒 皿 数の子

牛蒡 人志ん

菓子 右同断

一はま弓・菖蒲刀、尤古板之類金銀かな物并ニ箔用申

(四五丁目裏)

間敷事、

一雛并もて遊び人形類八寸以上可為無用候、右已下  
之分ハ鹿末之金入とんす類之装束者不苦候事、

一雛道具梨子地ハ勿論蒔繪ニ候共、紋所之外無用之  
事、

一高直之鉢植もの賣買停止せしめ候事、

一させる其外もてあそひ同前之品々金銀遣候義も

勿論、彫物象眼之類並蒔繪等結構ニいたす間敷事、

一女之衣類大造之織物縫物無用ニ可致候、縫金糸等

入候而も小袖表一ツニ付、代銀三百目染模様小袖

(四六丁目表)

表一ツニ付、代銀百弍拾目を限、夫々高直之品賣買  
致間敷候、帷子も右ニ准し可申事、

一町人共一統ニ花美之儀無之様致し、自今町人男女  
ともに分限不相應結構之品着用致し、又者髪之鋸  
り等迄も大造成品用い候もの候ハハ、組之者見懸  
次第右居所名前等糺町役人差添、直ニ奉行所へ召  
連吟味いたし候間、左様ニ可相心得候事、

一くしかうがひ髪さしの類金ハ勿論不相成鼈甲も

細工入組高直之品相止、櫛代銀百目を限りかうが  
ひ髪さし右ニ准し下直ニ仕込可申事、

(四六丁目裏)

但髪結ニ縮緬之色切をこしらへ、又者女子用い  
候はき物鼻緒等高直之品賣買致間敷候事、

右之趣、享保・寛政之度并其後も相觸候趣も有之候  
所、累年世上花美ニ相成、銘々身分をも不辨立派を  
競ひ、且又外見は不見立様ニても内實高直なる品  
々猥に売買いたし候もの共も有之由ニ候、たとひ  
遊びの品ニ無之候ても、度々觸置候儀を當座の事  
之様ニ相心得候分畢竟等閑ニ成り法度を背候段、  
不屈之至ニ候、併是迫之儀ハ格別之御高免を以て  
先御咎ニ不被及御沙汰ニ候條、難有奉存候、今般厚

(四七丁目表)

き御趣意を以て、風俗改候様被仰出候儀ニ付、不輕相心得可申候、尤是迄仕込置候品も可有之候ニ付、來寅年々屹度停止たるへき候條、觸面之趣相背候もの有之おいては、役人相廻遂穿鑿無用捨敷數咎可申付候、尤紛敷致方□□□□は途中にて往來之者を捕改候儀等決して無之事ニ候、若右體之者有之候ハ、其者を留置早々可訴出候、自今奢侈高價之品武家等ニ誂候もの有之候ハ、奉行所へ相伺可任指圖候、右之通町々へ相觸候條、被得其意、惣て花美高價之品誂申間敷、此度之御趣意彌厚相心得

(四七丁目裏)

諸事奢々間敷儀無之様可被致候、右之趣可被相觸候、以上、丑十月  
右者御普請奉行觸にて、寅正月八日御代官々相廻り候事、

近年市中において、女髮結流行いたし、別て懦弱之風儀ニ付、此度別紙之通町御奉行・御郡代へ相達候事ニ候、依之支配有之面々を始め御家中之儀無人相暮候面々、且家來者家族ニ至迄屹と心得違無之様可有通達旨、元々中申達候事、

(四八丁目表)

別紙寫

近年市中において女髮結職を以て渡世いたし候者、

致流行専相用、追々無格御奉公人家族共端々ハ御家中へも入込候様相聞へ、別而如何之風俗畢竟賣女舛之所行ニも等敷次第、懦弱之至リニ候條、向後之義、右職業を以て致渡世候者、屹度指止一牧相用不申様取究可申候、且郷分之義も市中ニ隣候場所へハ勿論之義遠郷たりとも、端々相用候様相聞候條、市中同断取究可申旨町御奉行・御郡代へ被申間義可有了簡旨、元々中申達候事、丑十二月廿五日

(四八丁目裏)

文恭院様御位牌慈音院御安置、来る廿七日夕一夜一日御遷座御行再御忌御法事、廿八日夜夕廿九日迄御執行ニ付、輕罪之者御免被仰付、御法事中神妙可罷在旨、高取諸奉行迄寄々御寺へ相詰可申旨、

寅正月廿四日

(四九丁目表)

貞心院様御病氣御大切ニ付、二月八日晚六ツ時迄間御觸翌日夕□□午刻御卒去被遊候ニ付、十四日迄、同廿七日迄穩便御出棺迄之間、肝煎番御年寄月番宅へ罷出、日々御機嫌伺御出棺後ハ右同断、同九日九ツ時御帳付、十四日御帳付、是夕七日目御帳付、三月廿七日御忌明御帳付御中陰之間、御山下物靜ニ可罷在旨御觸有之、委ハふ□節句・雛祭之儀御中陰之間、



「此度操師山村日向義操芝居興行願之通申付候、右二付格付以上處女たりとも見分之義無用之事二

候、此旨屹と相達筋二ハ無之候得共、冬二相心得御

家中之面々寄々無洩通達之義可有了簡旨、御目付

申達候事、 寅四月二日

(四九丁目裏)

御家中隠居人之義、剃髮惣髪等にて俗躰二紛不名相唱、又俗躰にて法體之名相唱、十徳相用、或ハ白衣

にて往来仕候向も有之候様相見へ、右ハ一體不相

應之筋二候條、以後名着眼等不都合無之様各々御

家中へ可有通達旨、御目付中申達候事、

寅四月四日

覚

御家中の面々質素儉約之義二付てハ、先年今度々被仰出候御趣意も有之候上、昨年尚又厳二被仰付、

(五〇丁目表)

先相急相守候様相成候得共、尚又此度市郷之者共

義二付、別紙之通相觸候義二候間、右様相心得、御家

中召仕之者共坏、右之引合等二無油断、此段ハ家中

并二無格末々迄不相洩様、屹可申付旨被仰出候條、

夫々可有通達候、以上。

寅四月廿四日

質素儉約之儀ハ、先年今度々被仰出、既二昨年も尚

又改て被仰出候所、一応者御趣意相守候姿二相見候所、いづとなく相弛ミ此砌二至端々不心得之者も有之、召捕行着被仰付有之、懸別而不守之事二候、

(五〇丁目裏)

此上御別□を始前々觸達候趣も不相守者有之候

二おいてハ見当次第無手當可申付候、将又高價之

草花或ハ飼鳥女櫛笄、其餘毛綿二ても高直之色々

決而賣買仕間敷候、向後右様不都合之品々取扱候

者於有之者、屹と咎可申付候、右寄々□程之者有之

候ハバ、其所之役人共落度可申付候條、無油断重々

取究心得違無之様相伺可申候、右之趣町御奉行・御

郡代へ被申聞義可有了簡候、以上、

(四国大学文学部日本文学科日本文化史・博物館学研究室)